

パリ市街の南部に位置する大学都市には、薩摩屋敷と呼ばれる日本館がある。両大戦間にパリで派手な散財をして話題を攫った薩摩次郎八の資金供与によって落成した施設として知られる。その一階の図書室には、かつてのパリ日仏協会に所蔵されていた書籍も何冊か、有為転変を経たのちに流れついていた。そこに『仏文雑誌』という粗末な古雑誌の端本を見つけて手に取ったのは、1981年、今からはや24年前のことになる。1892年に、お雇い外国人法学者ポアンナードによって発刊された学術誌だが、1895年の第10巻には、「明治美術会第7回展覧会」に取材した展覧会評が見える。著者はEmmanuel Tronquoisとあるが、当時はどういう人物か判断もつかなかった。久米桂一郎と黒田清輝の風景画のほか、浅井忠の旅順戦役に取材した戦争画などが、画家自身による素描の複製で掲載され、会場の配置図まで添えられている。今にして思えば、この記事は同展覧会に関する現存する最も詳細な記録であった。

トロンクワの名前に次に出会ったのは、当時まだリシュリュー街にあったパリ国立図書館の版画部においてだった。版画部特別室には、二階の高さに四角をぐるりと回廊が巡らせてあり、その上に天井まで書棚が迫り上がっている。そこには、初期の日本趣味評論家として名高いテオドル・デュレ寄贈による、日本の画帳や絵手本の収集が壁一面を覆っている。栃木県立美術館の、小勝禮子さんに誘われてその調査をした折り、特別室司書のジゼル・ランペール夫人から、参

忘れられた、フランス最初の日本文献書誌学者

エマニュエル・トロンクワ（一八五一年九月一八）について

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授 稲賀繁美

考書棚に配架された、手書き訂正入りの目録を教えられた。デュレは日本人K.カワタと称する人物の協力を得て目録を作成したが、それに詳細な書き込みがなされている。見るとこれが、ほかならぬトロンクワの仕業だった。1907年に実業家、ルポーディーが507タイトル、1656冊に及ぶ日本の版画本などを寄贈し、これがデュレ・コレクションに続いて貴重版画本の棚に並ぶ。それらもまた、元来トロンクワが収集した書籍だった。

三度トロンクワの名前に接したのは、1984年だったか、当時リュクサンブール公園南のミシュレ街にあった、パリ大学美術史図書館でのこと。日本が1900年のパリ万国博覧会に際して刊行した、仏語の『日本美術史』なる書籍を見つけて閲覧を申し込んだ。思わぬ大冊に驚嘆しつつ頁を捲る。日本側委員会会長だった、元画商の林忠正による前言を見るのと、日本語原文をフランス語に訳したのは、エマニュエル・トロンクワ氏。だが時間的制約のため、文体彫琢は、著名な新聞記者、ティエポー・シッソんに依頼した、とある。専門用語辞典もない当時、訳者は適切な語彙をいちいち拵えるところから始めなければならなかった、と林は内情を語っている。こうして、当時は有数の日本語遣い、トロンクワの名前が記憶に刻まれた*。

こうして気にはなりつつ、多忙にかまけて追跡調査を怠るまま、いつしか20年の歳月が流れた。そこへクリストフ・マルケ氏から一本の論文が届けられた**。見ると、かのトロンクワに関する新事実が、一

次史料を駆使して次々に解き明かされている。それによると、トロンクワは、画家のラファエル・コランによる黒田清輝宛ての紹介状を持参して1894年来日。その背後にはコレージュ・ド・フランスの中国・タタール・モンゴル語教授に立候補しながら、中国考古学のエドゥアール・ジャヴァンヌに敗北したという経緯があった、という。イニシアルのE Tがフランス語では「été」に通ずることからか、漢字の「夏」を印に取り入れていたことも判明した。1911年に帰国して、パリ東洋語学校のレオン・ド・ロニーの後任を襲おうとするが、これも失敗。フェリシアン・シェリーの百科全書的な書物*Le Japon illustré* (1914)に掲載の図版約700点も、多くはトロンクワの提供という。計画した日仏・仏日辞典も未完成のまま原稿は散逸。ここに、フランス語圏での日本知識の基礎固めに貢献しながら、才能に比べて不遇な生涯を送り、忘却の淵に沈んだ、ひとりの文献学者の姿が浮かび上がる。

* 日本語版『稿本日本帝國美術略史』[1900/1908]は、小路田泰直氏序文・解説により復刊[ゆまに書房、2003年]。その詳しい書誌的検討は、森仁史「『稿本日本帝國美術略史』の成立と位相」『近代画説』10号、2001年）。

** Christophe Marquet, 《Emmanuel Tronquois, un pionnier des études sur l'art japonais, sa collection de peintures et de livres illustrés d'Edo et de Meiji》, *Ebisu*, Nr. 29(2002)pp.115-165, なお本論文は、近く日本語訳も公刊予定。